

## V・ウルフと feminism

岩井 富美子

ウルフの小説を読む者にとって、見のがすことの出来ない一つの面がある。それは、彼女の自らの性に対する思索、一口にいえば、彼女の feminism である。彼女の feminism については、これまでに多くの批評家が言及し、さまざまのことを述べているのである。Forster は、彼女のこの一面を、her peculiar side といい、彼女がただ単に思索の人であったのみでなく、social creature であった一つのあかしとして、このことをあげ、その傑作のあらわれとして、「自分だけの部屋」、愚作のあらわれとして、「三ギニイ」をあげているのである。<sup>1)</sup> また、Wyndham Lewis などは、ウルフを全くの女権拡張論者だときめつけ、次のように言うのである。

……私はどうしても女権拡張論、もしくは戦闘的女性感情という茨の地帯を横断しなければならない。えげつない言い方で恐縮だが、私は、ウルフ夫人の背中を借りて、この地帯を運んでもらうことにした。ウルフ夫人なんて、全然無意味である。彼女は純然たる女権拡張論的現象にすぎない。<sup>2)</sup>

そして、彼女と同性の Elizabeth Bowen さえも、次のように言うのである。

What must inevitably be called Virginia Woolf's feminism appears most strongly in her doctrinal, non-fiction books; most notably in "A Room of One's Own" and "Three Guineas" -- it was a bleak quality, an aggressive streak, which can but irritate, disconcert, the adorer of Virginia Woolf the artist.<sup>3)</sup>

どうしても、ウルフ夫人のフェミニズムと呼ばなくてはならないものが、彼女の教義的な、ノン・フィクションもの、とりわけ、「自分だけの部屋」と「三ギニイ」に最も強くあらわれている。この荒涼とした、攻撃的な一条のきらめきが、芸術家ウルフの賞賛者にとっては、いらだたしくもあり、またとまどいでもあろう。

これらは、ごく二、三の例にすぎないのであるが、かように、ウルフの feminism は、多くの作家の不興をこうむっているのである。そして、こうした作家がきまってやり玉にあげるのが「自分だけの部屋」、それに「三ギニイ」である。しかし、彼女の feminism は、こうした non-fiction にのみあらわれた一条の光といえるであろうか。また、Forster のいうように、一つの side として考えていいものでであろうか。筆者は筆者なりに、ウルフの feminism については、少しばかりの見解をもつのである。ウルフの feminism とは如何なるものであるのか、彼女のこの面をいまだ少し深く考察することも、また彼女の作品のよりよき理解には、きわめて重要なことのように考えられるのである。実際、最近再評価を叫ばれている、ウルフをとりまく後光の中に、この feminist Woolf という光もまじっていることはたしかである。ここいらで、feminist Woolf に、正しい光をあてるべきではないであろうか。

ウルフの女権について考えるとき、そもそも「女権」という言葉そのものが問題なのである。われわれが、通常「女権拡張論者」という言葉から連想する女性は、旗を振って、街頭をねり歩き、「女性にも男性と同じ権利を！」と叫ぶ戦闘的な女権拡張論者なのである。すくなくとも、「女権」という言葉そのものが、そういったニュアンスを感じさせる言葉なのである。事実、ウルフと同時代には、こうした熱狂的な女権論者も、たくさん存在していたことはたしかである。しかし、奇妙なことには、当のウルフは、この戦闘的な女権論者を、もっとも忌みきらったのである。彼女の縁者、Clive Bell の記録によれば、

... it was not in political action that her feminism expressed itself: indeed she made merciless fun of the flag-wagging fanaticism of her old friend Ethel Smythe.<sup>4)</sup>

彼女の女権主義は、政治的な行動の中にあらわれたのではない……実際、彼女は、あの親しい友達、Smythe の旗うちなびかせる熱狂主義を、こびっとくからかったのである。

とある。大切なことは、ウルフの女権主義は、こうした女権とは、根本的に異質のものであったということである。彼女の目ざしたものは、更にひろく、女性の知的自由を叫ぶものであり、あくまで文学者としての女権であった。しかし彼女の feminism は、今日なお、一般の女性に対しても、極めて多くの示唆に富むものと考えられる。彼女の女権主義は、女性の眼を「外」へ向けるのではなく、つねに女性の内面意識を開こうとするものであった。Pendry は、すでに、これを feminism ではなくして、femininity と呼ぶ。

ウルフは、先づ第一に、女性が憤怒すること、怒ってものを書くことを、きびしくいましめているのである。女性が自己に与えられていないもの、自己の持たざるものを求めて、数々の

憎しみ、うらみを持つことを、いましめているのである。女性尊重の英国においてさえ、昔から、女性に与えられた知的自由は、アテネの奴隷いにも劣るものであったという。英国史をひもといってみても、平凡な女の生活記録などは、何一つのこっていないのである。すなわち、人間あつかいをうけていなかったらしいのである。ウルフは、たとえ、シェイクスピアに、兄と同じ天分をもつ妹があったとしても、決して、兄と同じような作品をものし得なかったであろう。それどころか、おそらくは、狂人とののしられ、半ば女の、半ば男の魔法使いとして、ついには、自らの命をたってしまうのがせきの山であろうと、いにしえに生まれた天分ある女性の悲劇をのべるのである。かかる環境にあって、多くの才能ある女性の文学作品が、憤懣という炎にもえつきてしまっていることを此の上なく、遺憾に思うのである。

そもそもウルフは、芸術家の創作態度について次のように言う。

...the mind of an artist, in order to achieve the prodigious effort of freeing whole and entire the work that is in him, must be incandescent, like Shakespeare's mind. There must be no obstacle in it, no foreign matter unconsumed.<sup>5)</sup>

芸術家の精神というものは、自己の中の作品を、完き形で、そっくり解放する異常なる努力を完成するために、白熱するものでなければならない。丁度シェイクスピアの精神のように。彼の心の中に邪魔物があってはならない。もえきらぬ異質物など一切あってはならない。

すなわち、女性の憤怒、いきどおりの念が邪魔物であり、もえきらない異質物であるというのである。彼女がジェーン・オースチンをこのシェイクスピアと並べ賞するのも、ひとえにこのゆえんである。彼女は、シャーロット・ブロンテを、オースチンと比較する。おそらくは、文才という点では、シャーロットは、オースチンをしのいだであろう。しかるに、後者の方が、はるかにゆたかに多くのものを盛り得たのは何故であろうか。それは、オースチンの創作態度なのである。「ジェイン・エア」の一部を引用してみよう。

「誰が私をとがめようというのか！ きっと多くの人々がとがめるに相違ない。私のことを不平家だと言うだろう。だが私はどうしようもない。……苦しいまでに心がみだれることもある。……この地上に住む無数の人々の中に、いかに多くの反逆の焰がもえさかっているか。女は普通きわめて温和であると考えられている。だが女とて男と全く同じように感情がある。女も男の兄弟たちと同じくその才能を働かせる機会と、その活動の舞台が必要である。女が余りにもきびしい束縛と、余りにも甚だ

しい沈滞のために苦しむのは男の場合と全く同じである。女はプディングを作ったり、くつ下をあんだり、ピアノをひいたり、ししゅうをしたりするだけで満足すべきだと、女よりも特権のある同じ人間の男たちが言うのは狭量である。<sup>6)</sup>」

ウルフは、シャーロットの、この憤懣<sup>ふんまん</sup>、激越な調子が、彼女の姿をすっかりゆがめてしまっていることを指摘する。女性本来の姿がみにくくゆがんでしまっていることを強調するのである。

当時、女性が許されていた活動の場は、多くの客の出入りする共通の居間ただ一つであった。女には、旅行も、一人歩きも、ナイチンゲールが叫んだように、30分の自由な時間さえも許されていなかったのである。かかる限られた環境にありながら、この環境がオースチンの作品を侵している気配が全然見当たらないのである。女性の身でありながら、不満をあらわさず、人を恨まず、憎まず、あらゆる邪魔者をやきつくして、静かに書いた人がオースチンであった。まずこの点において、ウルフの女権は、「外」に向かって求めるものではなく、「内」に向かって反省を求めるものであったと云えるのである。

第二に、ウルフは、女性が男性をまねるということを極度にいましめている。このことは多くの抱負をもらす彼女の処女作、「船出」において、一人の男性にはっきりと言わしめているのである。

“She does not attempt to write like a man. Every other woman does; on that account, I don’t read ’em.”<sup>7)</sup>

「オースチンは、男性のように書こうとはしないね。外の女流作家は、皆そうだが……男のまねをしたようなものは、みんなおことわりさ。」

男性のまねをしない、ということは、とりもなおさず、己れの Range をもっと尊重するということ、Pendry の、いわゆる honouring Range ということである。ウルフは、この広大、かつ複雑な世の中に、性が、二つしかないことすら不十分であるのに、どうして片方だけで充分にやっていけるかと力説するのである。両者の類似点よりも、相違点を明らかにすべきであると説くのである。男性には、男性の価値があり、女性には、女性の価値がある。てっとり早く言えば、戦争は、男の価値であり、花や着物は、女性の価値なのである。多くの子供たちにとりかこまれている女、また、ひざの上に一寸したぬい物をのせていたりする女、これらは、女性が人生において、男性とはまた別の組織と秩序の中心となっているということなのである。男性が女性から得る、うるおいは、決して情欲のみではない筈である。男性は、女性から、何か自分たち男性からはあたえられないもの、つまり、それが根源となって、自分たちの世界に

も、新たな創造を呼ぶようなものを得ている筈である。ウルフは、それにもかかわらず、多くの女性作家が、男性の価値に敬意を表して自己の価値を変えてしまっていることを指摘する。彼女によれば、シャーロット・ブロンテも、ジョージ・エリオットも共に、男性の武器をかかえてよろめいた作家なのである。Pendry は、ウルフについて、次のように言う。

...but her greatest driving-force was her desire to write like a  
woman, to express a feminine vision.<sup>8)</sup>

女性らしく書きたい。女の vision を表現したい。そうした欲望が、  
彼女を動かした最も大きな力であった。

かくウルフの feminism は、女性が女性の居間から如何に脱出するかということではなく、その中にいかに生くべきかということをなし遂げんとするものであった。ここにおいてもウルフの feminism は、またもや女性の内部の世界を表現することであった。

それでは、女性は自己の Range で、一体何が出来るであろうか。ウルフの表現しようとした女性の Range とは、如何なるものであったであろうか。

古来、小説にあらわれた「女性」を思い浮かべると、目もあやな、女性の列が出来上ってくる。しかし、よく考えてみると、これらの女性は、すべて男性によって描かれた女性であり、しかも、彼女たちは、男性との関係においてのみあらわれるというのである。少なくともジェーン・オースチンの時代に至るまでは、小説の中の女性は、すべて男性の光によって照らされていたのである。ウルフは、こうした女性の姿が、女性全体の生活の中では、いかに小さい一部分にすぎないものであるかを痛感している。女性と女性の関係、また女性による女性心理の研究など、まだまだ文学は、ゆたかになる可能性をもっているのである。ウルフは、こうした文学にあらわれる女性関係が、余りにも単純であるというのである。女性の Range には、未だ誰も手をつけたことのない、未開発の分野が、余りにも多いのである。何百年と、女性は、その居間にとじこもってきた。そして今やその居間は、女性の創造でみちている。この女性の中にある詩こそ、いまだはけ口がないというのである。

ここにおいて、必然的に、ウルフには、一つの大きなねらいが生じてくるのである。ウルフ文学の大きなねらいは、このいまだ光のあてられたことのない女性心理の幽暗な分野を開拓することであった。彼女のこの feminism から発したねらいが、ウルフ文学の大きな土台になっていることはたしかである。彼女は、一人の老女を思い浮かべる。彼女の人生の大半は、育児と、皿洗いと、つくろい物に終ったのである。そして、果してこの老女は、今までの小説にあらわれる華やかな女性の人生から、「これこそ人生だ！」と叫び得るものを得たであろうか。想像の女性と、現実の女性とは、かくも大きな相違があるのである。ウルフにとって、こうした、まだ世に知られない女の部分は、suffragist が決して掘りおこそうとせぬ、埋もれた宝であった。「船出」の Hewet が

...until a few years ago no woman had ever come out by herself and said things at all. There it was going on in the background, for all those thousands of years, this curious silent unrepresented life. If one's a man, the only confidences one gets are from young women about their love affairs. But the lives of women of forty, of unmarried women, of working women, of women who keep shops and bring up children—one knows nothing whatever about them. They won't tell you.<sup>9)</sup>

何年か前までは、自分で出て来て物を言った女性はなかったね。この奇妙な、だまった、埋もれた人生はずっと、日蔭でつづいていたんだ。男であるわたしが自信をもってわかることといえば、若い女性の恋愛事件だけです。40才の女性の人生、未婚の女性の生活、働く女性の、店を営んでいる女性、子供を育てる女、こうした女性については、皆目何もわかりませんね。彼女たちは何も話してくれないでしょう。

と述べ、また「わたしは沈黙の小説、人が口に出しては言わない小説を書きたい。」と述べていることは、以後の彼女の小説の行き方を如実に示しているのである。「ダロウエイ夫人」、「燈台へ」など、彼女の小説は、こうした新しい女の価値でみちあふれているのである。筆者が彼女の文学に、sweetnessの欠如を感じるのも、また彼女の文学に、情欲否定説が成立するのも、彼女のねらいが、男性によって照らされない女の部分、女性の未開の分野にあったからであろう。彼女が、心理分析的な形式をとったのも、女性が口には出さない内部の意識を表現するためであろう。ともかく、彼女の作品には、今までは目もくれられなかった無数の新しい真実にあふれているのである。

ここに、彼女のこうしたねらいが最も効果的にあらわれている一例をあげておこう。それは、彼女の eating に関する描写である。彼女の小説には、きまって食事のシーンが出てくるのである。ラムゼー夫人においては、dinner のシーンは、この小説の中心の場であり、彼女の描くスープ、焼肉、ヒラメ、芽キャベツは、直接読者の口へ入ってくるのである。ラムの「焼豚」、メレディスの「酒」もこれにはとてもかなわないのである。Forster は、彼女のこの食事のシーンを激賞して次のように述べている。

Food with her was not a literary device put in to make the book seem real. She put it in because she tasted it.<sup>11)</sup>

ウルフにとって食物は、彼女が、書物を最もらしく見えさせるために、わざとおりこんだ文学上の策略ではない。彼女はただそれを味ったから

織りこんだままであった。

Forster はここに、まさしく一人の女性があると感じるのである。しかも彼女が書いた境地は、決してこれを意識して書いたのではなく、むしろ「性」を忘れて、女性であることを忘れて書いたのであった。女性が、すべてのひがみ、うらみを忘れ、つまり性を意識しないで書いた時、はじめてここに、性の特質にみちみちたものが書けるのである。野島秀勝が、ウルフを読むにあたって、「自分は彼女の性を忘れていた。」と述べているが、これは氏が、ウルフ文学の真髄に触れているからであろう。ウルフの feminism は、終局は、性を意識することではなく、性を忘却することであった。彼女は、偉大な精神は、男女を問わず、男女両性をかねそなえていると説く。かように、女性が自己の性を忘れて、自分の書きたいと思うことを自由に書いたとき、必ずや両性を感動させるものが生まれると信じるのである。

かように考えてくると、ウルフの feminism は、決して彼女の non-fiction にのみあらわれた現象ではないように思われるのである。また、Forster が言うように、単なる彼女の one side でもなく、いわば、ウルフの文学を形成する根本的な基盤となっている思想であると考えられるのである。彼女のあらゆる作品には、この彼女の feminism が滲透している。彼女の関心は、つねに、こうした新しい女性像を完成することにあつたように思われる。彼女の non-fiction にあらわれる女権は、こうした彼女の思想の、ほんの末端にすぎないのである。少なくとも、筆者がこれまでに読了した作品は、すべて彼女の feminism 的思想と、目に見えないくもの糸によって、つながれている。要するに、ウルフ全体が feminism であり、feminism なくして、ウルフ文学は、成立しなかったと言っても過言ではない。おそらく、feminism という言葉そのものが、あやまりであるかも知れない。何故なら、女性が真実を述べる場合、これ皆 feminism と呼ばざるを得ないからである。

今日では、女性の Range も、日々変化し、拡大し、多彩なものになってきている。ウルフの後をついで、キャサリン・マンスフィールド、エリザベス・ボウエン等、多くの個性ある女流作家が、新しい女性の世界を描いている。こうした英国女流作家たちの中で、feminist Woolf の示める地位は、極めて重要であったと考えられるのである。今日では、多くの女性が、ウルフのいわゆる「自分だけの部屋」を持ち得たからである。 (S.41.1.19受理)

## 引用文献

- 1) Shorer, Mark: (ed.) ; Modern British Fiction Forster ; Virginia Woolf P.387
- 2) Lewis, Wyndham ; Men Without Art Translated by A. Kudo P. 125
- 3) Bowen, Elizabeth ; Collected Impressions P. 81
- 4) Bell, Clive ; Old Friends P. 101
- 5) Woolf, Virginia ; A Room of One's Own P.85
- 6) Bronte, Charlotte ; Jane Eyre chapter 12
- 7) Woolf, Virginia; The voyage Out P.66

- 8) Pendry, E. D. ; The New Feminism of English Fiction P. 27-28
- 9) Woolf, Virginia ; The Voyage Out P. 258
- 10) Woolf, Virginia ; The Voyage Out P. 262
- 11) Shorer, Mark(ed.) ; Modern British Fiction Forster ; Virginia Woolf P. 385

参 考 文 献

- Lewis, Wyndham ; Men Without Art Translated by A. Kudo (1957)
- Pendry, E. D. ; The New Feminism of English (1956)
- Shorer, Mark ; Modern British Fiction (1961) Forster ; Virginia Woolf
- Woolf, Virginia ; A Room of One's Own (1954)